

学校教育における音楽の授業づくり ～教師の自己 フィードバック「Teaching Essence（授業組立の要素）」の視点から～

著者	日? まり子
雑誌名	宮崎国際大学教育学部紀要 教育科学論集
号	4
ページ	81-89
発行年	2017-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1106/00000668/

学校教育における音楽の授業づくり

～教師の自己フィードバック「Teaching Essence (授業組立の要素)」の視点から～

日高 まり子*

【要約】

学校現場において、指導力向上を目指し授業づくりにおける種々の課題を解決することは極めて重要である。多様な児童生徒の表現力を育成できる音楽指導において授業づくりの要素を明確にしていくことで授業力向上を図ることができると考えられる。そこで著者は今までの授業実践から授業を組み立てる要素としての視点を整理し、授業実践の自己分析を進めた結果、幾つかの課題等が明確になり、これらの課題を自己フィードバックすることにより授業改善へつなげていくことができることを見出した。本論文では、「Teaching Essence (授業組立の要素)」として6つの観点を整理し、さらに授業展開例を示すことで、その有効性を提案する。

【キーワード】 音楽教育, 授業づくり, 授業の組み立て, 授業改善, 授業力

1 はじめに

授業には様々な形態があるが、学校教育における音楽の授業実践では表現活動（歌唱表現、器楽表現、身体表現）、鑑賞活動、即興創作活動などがそれにあたる。現行の小学校学習指導要領（平成20年告示）に示されている音楽の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」となっている。中央教育審議会（中教審）答申による現行学習指導要領の成果として、「音楽の良さや楽しさを感じるとともに、思いや意図を持って表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活との関わりに関心を持って、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育むこと等に重点を置いてその充実を図ったこと」があげられ、また課題として「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてその良さや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、良さを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては、更なる充実が求められる」とされている（中教審平成28年12月）。それらの学習指導要領のねらいを達成させるための音楽の指導においては、教師の音楽の専門性、技能などは基本的に必要であることは勿論であるが、子ども・教師・教材が構成要素である授業づくりでは「教育者としての使命感や子どもへの教育的愛情も含め教師の資質が問われる場面が多く、授業づくりの感性を備えることが大切である」（中教審答申平成18年7月）と考えられる。すなわち、教師の使命である授業は、教師の資質能力に託されていることになり、著者は授業研究等を通して、授業を組み立てるための基礎的な力を分析することで授業を改善させ、教師の資質能力の向上につながれると考えている。

本論文では、著者が教育現場で行った「気づき、感じ、つながりあい、そして響きあう」を授業テーマとした音楽の授業実践（日高、みやざき中央支援学校 2007～2016）から導き出された、授業を組み立てる際の指導における要素について自己フィードバックを行い、さらに新たな授業改善を行うサイクルを確立することを目的とした。授業づくりや授業の構成要素について、多くの論文やレポート等での提案がされているが、著者が提案する授業を組み立てる際の自己フィードバックを行うことに関する報告は著者が知る限り見当たらない。これまでに、中教育審答申、教育再生実行会議提言、京都市総合教育センター・カリキュラム開発支援センター（平成 18 年 3 月）（京都発！確かな教育実践のために「8 授業力向上に向けて大切にしたい視点」）、関根の「授業の構造と授業における教師の基本的な役割」としてまとめられた報告書（新潟市総合教育センター資料、平成 28 年 8 月）における教師の果たすべき役割や授業力向上の視点を参考に、授業実践において展開される音楽づくりの各要素について具合的な観点を整理し、観点ごとに授業展開例を提示する。

2 方法

①実践期間・実践場所

2007 年 9 月～2016 年 12 月の間、宮崎県立みやざき中央支援学校において実践した授業実践例から抽出した。

②対象

宮崎県立みやざき中央支援学校高等部 1 年生～3 年生および中学部生徒 1 年生～2 年生を対象とした。

③研究内容

対象生徒における授業を通して、指導における授業記録等から 6 つの要素について整理・分析し、観点を整理した（表 1）。①～⑥は、授業を構築していく順位性によって要素が配列され、著者のオリジナルの項目名をつけ分類した。

3 結果

1) 授業組み立てる際、重要と考えられる 6 つの要素「Teaching Essence（授業組立の要素）」

著者は、みやざき中央支援学校における音楽授業実践から音楽指導の授業づくりの観点を「①Inspiration（気づき、直感力）」、「②Feeling（感覚・気づき・感じる）」、「③Imagination（想像性）」、「④Creation（創造性）」、「⑤Storyteller（語り手）」及び「⑥Interaction（相互作用）」の 6 つの要素が重要と考えている。これらの 6 つの「Teaching Essence（授業組立の要素）」は授業を組み立てる際に、それぞれが独立した要素あるいはこれらの「Teaching Essence」が相互に作用・干渉しあい、授業を成立させていると考えている。表 1 に 6 つの「Teaching Essence」とそれぞれの要素に対応する観点についても具体的に説明する。

学校教育における音楽の授業づくり
 ～教師の自己フィードバック「Teaching Essence（授業組立の要素）」の視点から～

表1 6つの Teaching Essence（授業づくりの要素）とその具体的観点

授業づくりの要素	観 点	
<p>①Inspiration (気づき、直観力)</p>	<p>○子どもに気づく ○教材に気づく ○自分に気づく</p>	<p>Inspiration をベースにして始まる指導 ○実態、状況の洞察力 子どもの音楽への興味関心や音楽的な実態を把握するためには、音、音楽に対する反応を観察し、その反応を洞察することが大切である。その気づきが授業の目標設定につながっていく。また、提供する授業の素材、教材選択が適正であるかを気づくことが授業づくりの基本となる。 授業する環境や学習グループの実態についての気づきも授業づくりの要素として大切である。集団における個々の関係性や繋がりなど学習活動をアクティブに展開させる要素として気づくことでグループ作りなどに効果的な配慮ができる。 授業の場は空間の大きさや音の響き方、視覚的な刺激（掲示物や教室内にある目につくもの）で音や音楽の気づきを大きく左右する。教師はその学習環境への気づきが大切である。 ○教材に気づく 目標を設定し、授業の題材を具体的展開にするための教材（楽曲、楽器、素材等）のもつ音楽的な効果に気づくことが大切である。子どものテンポ感や拍子感、リズム感、調性、旋律への感性、発声発音のための呼吸や身体意識、楽器演奏のための運動機能、歌詞や旋律等の理解のための認知力、などの気づきは、授業展開においてねらいを達成させるために必要となる。 ○ねらいを具体化させるひらめき 様々な音楽活動をどのように選択していくかを決定する気づきは、瞬間的であり計画的である。指導のねらいを授業で具体的に展開するために音、音楽へのひらめきは重要である。そして指導のねらいの到達に向けて学習計画を描くことができるのである。 ○自分でできることを見極める直感力 提供する音楽を展開する教師の指導力により洞察された総合的な気づきを授業に生かしてことが大切である。実際の授業の展開においては、子どもの反応に瞬時にして気づき指導の展開の工夫に気づける指導力が求められる。</p>
<p>②Feeling (感じる・感覚)</p>	<p>○子どもを感じる ○教材を感じる ○自分を感じる</p>	<p>Inspiration から Feeling につなぐ指導 ○呼吸感、空気感、存在感 授業に参加している子どもの状態は呼吸から感じるができる。興奮している子ども不安感の高い子どもの呼吸は早く、配慮が必要であることを感じる事ができれば指導の展開の工夫につなげることができる。なぜそうであるのかという原因を考察しながら感じていくことが指導をより適切にすることができる。 ○繋がる素材・教材 子どもの様子を感じることは準備した教材、音の素材を感じ共感することにつながる。その教材、素材を使った音楽活動が子どもとつながる素材・教材となっていることを感じる事が大切である。 ○自分を見つめることのできる分析力 子どもを感じている指導者自身の気づきは、指導内容についての考察へとつながる。音の素材や教材の工夫の必要性も感じられることが必要である。即興的なアレンジ力が求められる場面も多い。</p>
<p>③Imagination (想像性)</p>	<p>○授業を想像する ○子どもの内面を想像する ○繋がりを想像する ○教材の展開の拡がりの想像 ○即興的に今を想像する</p>	<p>Feeling から Imagination に展開する指導 ○子どもの姿、自分の姿が見えるか。 授業をイメージする力をもつことは重要である。準備した授業内容がどのように展開されるかをイメージできるかは、授業の成立に大きくかわる授業力である。子どもがどのように活動するであろうか、どのように反応するであろうか、どのように理解を深めることができるであろうか等、子どもがイメージできことで教師の姿もイメージできる。その場面はいくつものパターンがイメージされることが大切であり、そのい</p>

	<p>○自分の思いを想像する</p>	<p>くつかのイメージで授業の準備や工夫が決まる。 ○今、ここで起きていることが見えているか。 準備された授業ではあるが、実際の授業場面では様々な展開が見られる。即時的な反応は必要であるが、変化する実際の場面においてイメージ化して展開の工夫を子どもに合わせながら授業のねらいから逸れないようにいくことが必要である。学習場面の生徒の姿をイメージしていく。 ○言語化できる空間と非言語的な空間の共有 音や音楽は言語化できる場面ばかりではなく、イメージを共有する場面が多くある。音や音楽から感じる様々なイメージは授業展開を具体的にイメージできることが大切である。 ○様々な場面をアレンジできる応用力 イメージされた音楽活動は発展的な学習活動への創意工夫へとつなげることができる。</p>
<p>④Creation (創造性)</p>	<p>○授業を創造する ○授業をストーリー化する ○授業を色づけする教材 ○全身で創造する授業 ○授業を描く ○子どもとともに創造する時間を描く ○授業は子どもの主体的学びから創造され進化し続ける</p>	<p>Imagination からより Creation に発展する指導 ○音を創造する 想像された音や音楽を構造化していくことで創作へと発展させることができる。 ○子どもと共につくる即興的な音、音楽 子どもの作り出す即興的な音や音楽の世界を共感・共有し創造していく音楽づくりの過程が大切である。 ○作られた音、音楽を意味づける。 想像された音や音楽を、音楽作品として創造していく活動を大切にしていける。音楽的内容の知覚をさせながら、基礎的理解を深め、音楽の作品の主体的な意味づけする場面を創造できることが必要である。 ○時間、テンポ感、リズム感、ハーモニー、距離感、空間把握の創造、音楽を構成する要素を理解し、音楽技能の習得を図らせ、発展的な学習への興味関心を高めていく場面を創造していくことができる。 ○色彩化され映像化される授業 イメージされ創造される過程で、音や音楽を美術的感性での想像的な活動を展開する。音絵や即興的な描画など視覚化させる創造的活動など発展的な活動へとつなげていく。 ○今ここに見える子どもの表現を高めることのできる創造 子どもの想像する音や音楽の世界を指導者が工夫し想像することで豊かな情操を養っていく。</p>
<p>⑤Storyteller (語り手)</p>	<p>○授業を語る語り手としての指導者 ○授業を構成し、演出する ○子どもの内なる物語を語る ○子どもと繋がる物語の創造</p>	<p>Creation を Story につなげていく指導 ○創造した授業を演じること 授業の流れを物語として創造し組み立て、教師は語り手として授業づくりをする。 ○子どもが主役となる授業のシナリオを描き続ける。 音・音楽を素材にした授業展開をシナリオとして創造し、語り手である教師は役者としての子どもたちの個々のオリジナリティを大切にしながら役づくりをしながら子ども一人一人を引き立てていく。 ○子どもとつながった瞬間を感じる。 語り手である教師は、役者である子どもたちの心情を共有し、一体化して工夫された音・の世界が広がる音楽物語である授業を通して、感性を高めていくことができる。様々な音や音楽の響きを感じてイメージし創造しながらつながりあう瞬間、瞬間の時間を大切にしていける。 ○広がる響きの小さな感動を語り合えるつながりあり。 教室いっぱいに音、音楽が響き、創造的な作品づくりへの学習の感動を共有する。</p>
<p>⑥Interaction (相互作用)</p>	<p>○子どもが他者を感じる ○授業の中の相互関係 ○ティームティーチ</p>	<p>Interaction を活用する指導 ○相互的な関係 子どもは授業の展開の活動の中で、教師や友だち等他者を感じ、さらに相互的な関係性を見出すことができる。同じ空間で創り出す協働的活動の体験、作品作りの過程の体験的活動の中での自己実現、作品</p>

学校教育における音楽の授業づくり
 ～教師の自己フィードバック「Teaching Essence (授業組立の要素)」の視点から～

<p>ング・子どもの発達をチームとして願う思い ○他教科、領域との連携</p>	<p>完成の感動の共有など相互的な関係の中からの体験が重要である。個の表現活動を個の表現活動を集団の表現活動として発展的に展開することで社会的な秩序の学びへとつなげることができる。 ○教師同士の相互作用で成立する授業の展開を創り出す。 教師がチームで子どもを指導できるための体制づくりの重要性。複数の指導者による指導体制は、子どもの実態の共通理解や指導目標の確認などを踏まえた上で、効果的な指導にすることができる。単一教科のみの指導ではなく他教科（美術、体育、国語、理科、社会、等々）、領域との連携を図ることでよりダイナミクスな題材の展開につなげることができる。チームティーチングとしての効果的活動を創造してより学習効果を高めることが期待できる。 ○自己の確立をねらい、社会性への気づきを高める。 音、音楽を媒介とした活動は、他者への気づきが生まれその気づきは二項関係から三項関係へと発展的活動となり、社会性広げていく。自己表現力を高め、他者に認められる体験を通して、自己肯定感や自己実現力を向上させていくことができる。</p>
--	--

2) 授業組み立てにおける6つの「Teaching Essence」の授業展開例

授業組み立てにおける6つの「Teaching Essence」における①「Inspiration (気づき、直感力)」について、その授業展開例を【授業展開例1】に示す。音・音楽に気づく場を設定した場合、音の響きに気づくことから授業は始まる。その後、音のある時間と音の無い時間に気づく、自分と他者への気づきもある。また、音から音楽への気づき、共に感じ合う響きの空間への気づき、他者への気づきから二項関係が生じ、非言語コミュニケーションとして音楽活動が始まる。

【授業展開例1】

<p>音・音楽に気づく場の設定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが音楽室に入ってくる時に、題材や季節、話題になっている音楽が自然と聞こえるように流す。子どもは、音、音楽が流れていることに気づく。音楽に時間がすでに始まっていることに気づく。 ・ 子どもに楽器が見えないように楽器の音を鳴らして、音に気づかせる。「何、今の音は？」と音への関心を広げる。 ・ 自分の鳴らした楽器の音に気づく。音を出した手指、身体の動き、自分の思いに気づく。 ・ 子どもが音、音楽に気づいているかどうかには指導者が気づくことができるか。何から気づけるのか（表情・呼吸・身体の動き・瞬きなど） ・ “あいさつの歌”，“あいさつドラム打ち”での歌声や音によるコミュニケーションをする。自分だけでなく友だちの活動の様子を気づき、他者の存在に気づき意識されたことを気づく。さらに自己が確認されたことに気づく。
---------------------	---

②「Feeling ((感じる・感覚)」についての授業展開例を【授業展開例2】に示す。気づいたことに感じて授業が動き出す。音・音楽に気づく場を設定した場合、音・音楽の響きの揺れを空気や身体の揺れと共に感じる。音・音楽の介在する音空間において他者との非言語コミュニケーションを感じる。子どもの気づきを感じるためには、自分の気づきにも教師は敏感でなくてはならない。気づくことと感じることは一体化される感覚ではあるが、気づきから感じることにつながる過程を感じていることが意識できるかが大切であると考え。今、子どもと出会っている授業の瞬間に相手の呼吸がどうあるかを感じることはできるのかを感じる。深くゆったりした安定した呼吸であるのか、細かく浅い不安感の強い呼吸であるのを感じる。内面的な感性とつながる音楽をどのように感じているかを感じることができる指導者の高い感性が求められる。感性の豊かさを育てるためには何よりも感覚的に感

じることが大切である。

【授業展開例 2】

音・音楽を感じる場の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・ ハンドドラムによるあいさつ活動で、ハンドドラムに手を乗せ、響きやリズムを体感する。音のやりとりをして言語を介入させずにコミュニケーションする。 ・ 子どもの動きに合わせて教師は打楽器や旋律楽器で即興的に音楽を演奏する。自由に動いていた子どもは、音・音楽の動きと自分の動きが同じであることを感じて、身体表現を楽しむ。 ・ カホンに乗って、楽器の響きを全身に感じる。手や足を使って音を響かせ、音や響き、身体の動きを感じて表現活動を楽しむ。 ・ カバサやツリーチャイム、ギロ、ラチェッタなどの音を鳴らしながら感覚刺激を感じる。思いがけない音や未知の音の響きなど多感覚な新しい体験を楽しむ。
--------------	--

③「Imagination（想像性）」についての授業展開を【授業展開例 3】に示す。音・音楽に気づく場を設定した場合、授業は、その時間を具体的に想像することから始まる。そこでは、様々なイメージが指導者によって広げられることが重要である。子どもの姿や、表情、態度、子どもから発せられる言葉が次々に授業場面を予想する中で見えてくる。その子どもの姿をいかに想像できるかが授業計画における重要なポイントである。綿密な授業準備のためには授業の想像が重要である。子どもの姿を想像し、何よりも子どもと向き合う教師自身を想像する。学習指導案に記述できにくい想像的で感覚的な要素でもある。

【授業展開例 3】

音・音楽を想像する場の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音や音楽を効果的に使って絵本の読み聞かせでの想像的な活動を楽しむ。場面の雰囲気や音や音楽で表現したり、登場人物のテーマ曲を作曲したりして、より具体的な想像力を高め表現活動を楽しむことができる。 ・ 教師は生徒との活動を想像し、様々な楽器や教具を準備し、授業展開を具体化することができる。 ・ 美術で作成したお面で想像的な場面を設定し、お面ダンス（仮面舞踏会）での即興的な身体表現や合奏づくりを楽しむ。 ・ 音や音楽、歌詞などからイメージした身体活動を楽しむ。個人の動きを模倣しながらグループの動きとして楽しみながら、作品として作り上げる。 ・ 様々な感覚刺激を楽しむイメージをもって教材製作やアンサンブルの工夫をする。 ・ 子どもに合わせた演奏のための編曲、作曲を提示して、オリジナリティのある音づくりを想像する楽しさを体験させる。
---------------	---

④「Creation（創造性）」についての授業展開例を【授業展開例 4】に示す。音・音楽を想像する場を設定した場合、想像された授業は、教師の感性によってさらに創造されていく。想像される授業を発展させ様々なバリエーションを生み出す創造性は、子どもの主体的な学びを引き出す。ここでは音・音楽を通して、言語的な創造や絵画的な創造、身体活動的な創造など教育音楽から芸術音楽を生み出す。時間、テンポ感、リズム感、ハーモニー、距離感、空間把握などの音楽的な要素は創造的な活動を生み出す。

学校教育における音楽の授業づくり
 ～教師の自己フィードバック「Teaching Essence（授業組立の要素）」の視点から～

【授業展開例 4】

音・音楽を創造する場の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 即興的な音楽づくりを楽しむ。1対1でのコミュニケーション的な音のやりとりをグループに発展させ作品として創造していく活動を楽しむ。 ・ 音や音楽の印象を描く音絵づくりから創造的な作品づくりにつなげて楽しむ。 ・ 合唱での声のハーモニー、合奏での楽器のハーモニーなど音の響きを創造し、さらに表現を高めることを楽しむ。 ・ 子どもの主体的で自由な表現を保障し、ともに作品づくりを楽しみ、創造的な作品づくりを支援する教師の芸術的創作力を発揮することができる。 ・ 音や音楽を感じた身体表現活動を通して、身体のような動きを創造する。一人の動きをグループに発展させ、全体の動きを創造させるダイナミックな活動を展開する。
---------------	---

⑤「Storyteller（語り手）」についての授業展開例を【授業展開例 5】に示す。語り手として授業を構成する場を設定した場合、授業は教師が語り手として物語を展開する。題材から具体的な授業過程を構成し演出する。授業のシナリオは演者としての教師に託される。教室を舞台とした教師の演技力は、授業を決定する。様々な題材においていろいろな役者がその役柄に合わせて演技していくのであるが、語り手である教師は、主役である子どもを引き立たせていく、Storyteller（語り手）としての演技力が求められる。

【授業展開例 5】

語り手として授業を構成する場の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの実態に合わせて、効果的な授業の流れを構成することができる。 ・ 題材に合わせて導入、展開、終結を想像して指導の展開を工夫する。 ・ 子どもの興味関心を高める豊かな表現力で授業展開ができる。 ・ 創造した授業を脚色し、役者として演技できる。 ・ 数曲をストーリー性をもって組み立てて、音楽をつないで授業を展開させる。子どもが主体的に創造的活動を展開できるように支援を工夫する。 ・ 教師のスキルを生かして、子どもの主体的な作品の完成度を高めるプロセスを学ぶ楽しさを知覚させる。
-------------------	--

⑥「Interaction（相互作用）」についての授業展開を【授業展開例 6】に示す音・音楽を使って相互作用をさせる場を設定した場合、学習活動の中で児童生徒は、教師との関係、児童生徒同士の関係の中で学んでいく。「Interaction（相互作用）」は児童生徒と指導者の相互関係、児童生徒同士の相互関係、そしてチームとしての指導にあたる教師集団の相互関係（Team Teaching）であり、集団による学習の視点としても必要な観点である。特に集団を構成しての授業展開においては、T1※指導の中心ではあるが、その指導をどのように展開できるかは、その集団の相互作用の要素が大きく関係するものである。※T1：チームティーチングなどの集団での指導の場面での主な指導者を示す。

【授業展開例 6】

音・音楽を使って相互作用させることのできる場の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子ども同士の音のやりとりから音のコミュニケーションとして発展させ音楽活動を楽しむ。音でつながりあう体験を楽しむ。 ・ 個の表現活動から他者との音のやりとりを楽しみながら集団の表現活動に発展させながら、楽曲の面白さを共有して合唱や合奏などの表現活動を楽しむ。 ・ 集団で学ぶ意欲を高めるために、興味関心のある題材や適切な教材を精選し提示の工夫をする。 ・ 題材の指導のねらいを明確にさせ、子どもの実態や指導のポイントを共通理解した他の教師と連携して表現活動を支援する。
---------------------------	--

4 考察

結果において、「Teaching Essence」とその観点を示し、さらに授業展開例を述べた。著者の授業研究を中心に分析された内容ではあるが、著者は初任者研修の指導教員として取り組んだ授業研究の指導においても、この「Teaching Essence」を活用して研修を実践している。この研修内容については、別論にて述べるが、学習指導案作成から授業実践までの取り組む中で分析された課題を、授業者が自己分析し整理する場面において効果的な観点となることも感じられた。

上述のように、「授業」の場面をどのように捉え、授業の構造を明確にすることは、教育現場においてより良い授業づくりをめざす授業改善において必要な観点であると考えている。関根は、「授業の構造と授業における教師の基本的な役割」のレポートにおいて、日々よりよい授業を目指して授業改善していくには、「授業を構造的にとらえること」と「授業を計画し実践、評価するために必要な教師の役割を具体的に明らかにすること」であると述べている（関根 2016）。さらに、関根は自らの授業の問題点が授業の構造の中でどの点かが把握でき、それに基づいて教師の役割をどのように変革すれば良いかのヒントが得られる（関根 2016）と述べており、関根の論点に「Teaching Essence」を適用できるのではないかと考えられている。

また、授業において果たす教師の役割について、関根（2016）は、(1) 授業前、(2) 授業中、(3) 授業後としてそれぞれの視点をまとめている。すなわち、(1) 授業前については、教材の設定、子どもの実態把握、集団の特性の把握、授業のねらいの設定と評価計画、学習課題、問題解決的な授業過程の展開構想、考える力の育成と共同学習の必要性、学力定着について、また(2) 授業中については、授業のねらい達成に向けた授業過程の展開の仕方、集団としての学習の成立について、一人一人の学習の成立について、学習集団の成長・人間関係の育成について、さらに(3) 授業後については、ねらいの達成度の評価と確かな評価方法の裏付け、一人一人の学習成果の把握、子どもの誤答やつまずきの分析と授業改善、集団としての学びの把握、学習集団としての成長の把握が重要であることを述べている（関根 2016）。

今回、著者が提示した「Teaching Essence」は、関根（2016）の(1) 授業前の場面や(2) 授業中の場面での授業づくりの自己分析のための基本的な観点として用いることが可能であり、授業力の向上につながると考えられる。(1) 授業前には①Inspiration（気づき、直観力）、②Feeling（感じる・感覚）の観点で、(2) 授業中では③Imagination（想像性）、④Creation（創造性）、⑤Storyteller（語り手）、⑥Interaction（相互作用）、を評価の観点と捉えることができる。さらに、(3) 授業後の場面に教師として自己の授業実践の評価は不可欠であり、自己の振り返りを授業構成の順序性を踏まえて①から⑥の観点で評価することで授業の改善につなげることができると考えられる。

京都市総合教育センター・カリキュラム開発支援センター「京都発！確かな教育実践のために 8 授業力向上に向けて大切にしたい視点」（平成 18 年 3 月）では、授業力について「子どもたちの確かな学力を保障する力」として捉えている。その確かな学力を「生きる力」知的側面を捉えた力、「豊かな心」とバランスの採れた「広い学力」、知識・技能の確かな力、知識・技能を生かす確かな力、自ら課題を見つけ意欲的に学び続けようとする力、学び方を学ぼうとする力、課題解決に向けて主体的に判断し行動できる力、物事の本質を深く捉えられる力、自ら進路を切り拓く力、としている。さらに授業力向上のための 4 つの視点として「豊かな子ども理解」「深い教材理解」「確かな指導法」「高まりあう学習集団づくり」を挙げている。教員に求められている「授業力」は、単に一方的に教え込むのではなく、子どもたちの「学習への関心・意欲を高め」ながら、「学び方を学ばせ」、「指導すべきこと

を指導しきる」力であり、また、子どもたちが、自ら課題を見つけ、意欲的に学び続けることにより、自らの進路を切り拓けるように指導する力である、としている。ここで述べられている授業力を高めるためにまとめられている4つの視点を「Teaching Essence」を適用して更に分析を深めて、授業づくりの課題をより具体的に明確にしていくことが可能であると考えられる。「子どもたちを豊かに理解する」視点には①Inspiration（気づき、直観力）、②Feeling（感じる・感覚）の観点、「教材を深く理解する」視点には①Inspiration（気づき、直観力）、②Feeling（感じる・感覚）、③Imagination（想像性）の観点、「確かな指導法を見つける」視点には、③Imagination（想像性）、④Creation（創造性）、⑤Storyteller（語り手）の観点、「高まり合う学習集団づくりを進める」視点には、⑥Interaction（相互作用）の観点での評価を加え、さらに自己フィードバックによって授業力を高めることにつながるができると考えられた。

5 おわりに

本研究では、6つの「Teaching Essence」と観点及びそれぞれの授業実践例を提示することで、授業を自ら振り返り評価するためのツールとして活用できることを提案したいと考える。今回提示した6つの「Teaching Essence」を用いた授業分析は、指導の課題を明確にして、授業改善への視点とつなげることができる可能性を含んでいるものである。教育再生実行会議の第七次提言の中に、「国際的な調査によれば、我が国の教師は、研究意欲が高く、教師間で授業研究がよく行われているとされている」とあり、「教師の影響力は子供の一生に及ぶ」ことを考慮すると授業づくりの研究を深めていくことは意義深いと考える。今後は、本方法をさらに改善し、他教科や領域にも汎用させながら、PDCAマネジメントサイクルを機能させた組織的な授業改善にむけた分析方法についても検証を重ねていきたい。

*宮崎県立みやざき中央支援学校

参考文献

- ・文部科学省 小学校学習指導要領 平成20年3月告示 P75
- ・文部科学省「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月 中央教育審議会）P161～P165
- ・文部科学省「今後の教員養成・免許制度の在り方について 1 これからの社会と教員に求められる資質能力（答申）」（平成18年7月 中央教育審議会）P1～P4
- ・「授業の構造と授業における教師の基本的な役割」 関根廣志（新潟市総合教育センター指導主事会議参考資料・日本協同教育学会研究資料 7 2016年3月）日本協同教育学会 P7, P16～P67
- ・「京都発！確かな教育実践のために 8 授業力向上に向けて大切にしたい視点」京都市教育委員会京都市総合教育センター・カリキュラム開発支援センター ブックレット（平成28年3月）P6～P18
- ・文部科学省「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育，教師の在り方について」教育再生実行会議提言（第七次提言）（平成27年5月）P11